東北は負けない

歴史に見る「弱者の逆襲」

幕末維新史研究家・会津史研究家
星亮一

講談社+α新書
プラスアルファ

常州大学图书馆
藏书章

東北は負けない

歴史に見る「弱者の逆襲」

講談社+α新書

星 亮一

1935年、仙台市に生まれる。東北大学文学部卒業。福島民報記者、福島中央テレビ報道制作局長を経て、文筆業に。戊辰戦争研究会を主宰。『奥羽越列藩同盟』(中公新書)で第19回福島民報出版文化賞を受賞。
著書には『会津落城』『大鳥圭介』(以上、中公新書)、『会津藩VS長州藩』『会津藩VS薩摩藩』(以上、ベスト新書)、『偽りの明治維新』(だいわ文庫)、『会津戦争全史』(講談社選書メチエ)、『謀略の幕末史』『明治を支えた「賊軍」の男たち』(以上、講談社+α新書)などがある。

講談社+α新書 464-3 C

東北(とうほく)は負(ま)けない
歴史に見る「弱者の逆襲」
星(ほし) 亮一(りょういち) ©Ryoichi Hoshi 2011

2011年8月20日第1刷発行

発行者 鈴木 哲
発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001
電話 出版部(03)5395-3532
販売部(03)5395-5817
業務部(03)5395-3615
カバー写真 星 亮一
デザイン 鈴木成一デザイン室
カバー印刷 共同印刷株式会社
印刷 慶昌堂印刷株式会社
製本 株式会社若林製本工場

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取り替えします。
なお、この本の内容についてのお問い合わせは生活文化第三出版部あてにお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。
Printed in Japan
ISBN978-4-06-272727-3

◉目次

はじめに　3

第一章　三陸大津波

映像の迫力　14
砂漠を走るジープ　16
土ぼこり　17
崩された「万里の長城」　19
荒れ狂う海魔　21
助かった漁船　24
転がった防潮堤　26
車ごと津波に　28
ハード対策の限界　30
母を探す家族　30
危機に立つ唯一の大学　33
一面なにもない　38
混乱した医療現場　40
破壊された防災庁舎　46

無事だった女川原発 50
分けた明暗 52
流された飛行機 56

第二章 福島原発炎上

前代未聞の大惨事 60
遅れた電源復旧 61
国家の大失策 63
なぜ福島に原発が 65
財界のリーダー 66
百姓知事 67
大野伴睦の子分 69

第三章 苦悩するフクシマの人々

真っ黒い壁 74
線路が消えた 77
不可解な静寂 82
惨たんたる光景 85
避難に次ぐ避難 88
怒り爆発 90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

隣接都市の苦悩 91
青天のへきれき 92
怒号飛び交う 95
住民避難 98
村落崩壊の危機 99

第四章 「想定外」という偽り

全電源喪失 106
貞観津波 107
多賀城と津波 109
東電は警告を無視 110
壊滅的打撃 113

第五章 東北は冷遇されたのか

インフラが悪い 116
白河以北一山百文 117
戊辰戦争の影 118
会津のゲダカ 119
安積疏水と野蒜築港 120
津波との闘い 121

未曾有の大凶作 122
ものいわぬ農民 123

第六章 原敬の逆襲

賊軍にあらず 128
敵の懐に飛び込む 130
東北大学 131
鍋弦線 133
郷土を誇る 135
差別と偏見 137
釜石製鉄所 138
艦砲射撃 139
魚が死んだ 141
東民の闘い 142

第七章 水産王国

漁師と商人の血 146
驚くべき出世 147
漁港検診 149
発展する三陸 150
東北新幹線 152
総理の時に開通 153

第八章　復興の姿

想定外は論外　156
もめる特区　157
福島県は足踏み　159
安全神話の崩壊　160
市民参加が課題　162
持続する心　167

第九章　声を大にして叫ぶ

情報の発信　172
壁を破るべし　173
岩手の人　175
問題は原発　177
寒村から原発の町へ　179
拝啓　原発担当大臣殿　180

あとがき　182

東北は負けない

歴史に見る「弱者の逆襲」

講談社+α新書

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

はじめに

未曾有の大震災から間もなく五ヵ月が過ぎようとしている。

日本人はこの震災で、さまざまなことを学んだ。いくら高い防潮堤を築いても、十五メートル、二十メートルもの高さの大津波には勝てないということだった。死者・行方不明者約二万七百人は、津波の犠牲者数としては明治三陸大津波に次ぐものだった。

家族、友人、人々の悲しみはあまりにも深い。

私は地震と津波の発生から四ヵ月の間に福島県、宮城県、岩手県の被災地を見て歩いた。惨たんたる光景に涙が流れた。

津波に対して鉄壁の守りと言われた高さ十メートルの宮古市田老地区の防潮堤も一部破壊され、津波は防潮堤をはるかに越えて町を襲い、根こそぎ流してしまった。

「自然に逆らってはだめだ」

田老の人々は大自然の猛威を前に、兜を脱いだ。

防潮堤頼みの防災では津波を防ぐことはできない。大自然とどう対話するかにかかってい

る。

三陸沿岸はどこもかしこも大きな被害を受けたが、なかでも陸前高田市は壊滅的な打撃を受け、跡形もなかった。鉄道も道路もずたずたに寸断された。いま三陸の被災地では高台に住居を移す新しい防災都市の建設計画が進んでいる。これは当然の策であろうが、住民は必ずしもそれを望んではいない。

特に漁師には反対する者が多い。日々、海を見つめながらワカメやコンブをとるためには海のそばで暮らさなければできないと主張する。

今後の遠洋漁業について一般企業の参入を考える宮城県に対して、地元の漁業団体は既得権を主張して反対している。しかし現実は漁船が流され、船団を組むことが困難である。

一方、福島県は今回の大震災で原発事故という予想だにしない最悪の事態に見舞われた。「フクシマ」の名前は世界に広まり、チェルノブイリ原発事故と並ぶレベル7となり、一時は多くの外国人が日本を去った。原子炉の爆発は免れ、復旧に向けての作業が進んでいるが、原発周辺の住民の避難生活は続いており、その数は約八万人に及んでいる（七月中旬現在）。福島県内の児童生徒は各地に疎開を始めている。

これまで東北が持つイメージは「豊かな自然と厚い人情」だった。

東北の空や海がもてはやされ、座敷わらしが駆け回る柳田国男の『遠野物語』はバイブル

であった。東北には多くの史蹟や、霊場霊山の不思議な舞台があり、多様な文化を背景に北方世界の存在を唱える人も多かった。

東北新幹線の青森開通も観光ブームに拍車をかけた。しかし、三陸海岸には高速道路が一部しかなく、盛岡、花巻、一関などへの横断道路も十分ではなく、今回インフラの遅れがひどく目立つなか、復興も遅れがちである。かつて作家の司馬遼太郎は「白河以北一山百文」という言葉をとりあげ、もともと東北は明治政府に冷遇されてきたと言った。

戊辰戦争が原因だった。

会津藩を中心に反薩長同盟を結び、薩摩・長州軍と戦ったが敗れた。勝利した薩摩・長州勢は、「東北の山は一山百文の値打ちしかない」と蔑視したのである。日露戦争、日中戦争、太平洋戦争でも、東北地方から召集された部隊は最前線に送られ、大きな痛手をこうむった。それを乗り越えようと、東北人も闘ってきた。薩長閥を打倒した岩手出身の平民宰相原敬は東北各地に鉄道網を広げた。同じ岩手出身の鈴木善幸は三陸海岸の漁港整備に尽力し、漁業を一大産業に育てた。

いまや仙台はプロ野球楽天イーグルスの本拠地であり、昨今、トヨタ自動車も主力工場を東北新幹線ぞいにシフトし、東北の発展はゆるぎないものになりつつあった。

その矢先の大震災だった。

私は悲しみを乗り越えて立ちあがる東北人の魂を信じている。

しかし福島県では様相が一変する。大津波に加えて原発事故という放射能の脅威にさらされ、地震、津波、原発事故、風評被害の四重苦にあえぎ、随所で悲鳴があがり、怒りが充満している。

震災直後に住まいを追われた人が約十三万人というのは、信じがたい数字である。

若い人々は仕事を求めて全国に散り、地域共同体の崩壊がはじまっている。

原発事故がいつ収束するのか、放射性物質の拡散が止まれば、地元に戻って生活ができるのか、そこがわからない。政府も福島県も口をつぐんで、明確な指針を示していない。

だが、いつまでも意気消沈しているわけにはいかない。なんとか以前の豊かな東北を取り戻さなければならない。原発事故で故郷を追われた人々に対しては故郷に比較的近いところに新しい町や村を創造する試みも必要だろう。原発は国の事業として進めてきたのだ。政府は責任をもってしっかり対応すべきである。

この本は原発の完全収束はむろんのこと、東北再興、未来国家日本の実現を願って書きあげた緊急リポートである。

◉目次

はじめに　3

第一章　三陸大津波

映像の迫力　14
砂漠を走るジープ　16
土ぼこり　17
崩された「万里の長城」　19
荒れ狂う海魔　21
助かった漁船　24
転がった防潮堤　26
車ごと津波に　28
ハード対策の限界　30
母を探す家族　30
危機に立つ唯一の大学　33
一面なにもない　38
混乱した医療現場　40
破壊された防災庁舎　46

無事だった女川原発 50
分けた明暗 52
流された飛行機 56

第二章 福島原発炎上

前代未聞の大惨事 60
遅れた電源復旧 61
国家の大失策 63
なぜ福島に原発が 65
財界のリーダー 66
百姓知事 67
大野伴睦の子分 69

第三章 苦悩するフクシマの人々

真っ黒い壁 74
線路が消えた 77
不可解な静寂 82
惨たんたる光景 85
避難に次ぐ避難 88
怒り爆発 90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb